

生命（いのち）の実感と似而非ヒューマニズム

大 森 正 樹（南山短期大学教授）

夏の始めにある本を読んでいたら、次のような文章が目にとまった。（A）
1. 生命はなぜいいことなのか。 生命体として生きているということ—自分の生命を維持しつつ、次の生命を再生産するという、格別意図的でもなく、実は意図以前に強いられているこの在り方が、「すばらしい」ことだということに、なぜなっているのだろう。「生命は宝である」ということに、なぜなっているのだろう。

価値の発生は、いくつかの宗教や、古代的な感情にその源を辿ることができるのかもしれないが、ふと醒めてみると、社会に流布する価値の多くが、この「生命至上」の変形であることに気づいて、不思議な気になることがある。間違っている、というのではない。よく考えてみると、なぜ皆そう思っているのかが、よくわからないのだ。

（中略）

あるいは「平和は尊い」という。なるほど、流血という事態は見るからに愚かしく、ましてや自ら立ち会いたくないものだ。おそらく殆どの人がそう感じているだろう。しかし、だからといってその想いがそのまま、「だから戦争はいけないものである」という価値として独立し、社会的に思想を規制する力となることとの間には、まだ埋められるべき溝がある。戦場で流れ弾に当たって死のうが、道端でマンホールに落ちて死のうが、或る生命それ自身にとっては、実は同じことではないだろうか。なぜなら私たちは誰ひとりとして一度も死んだ経験がないのだから、その価値についてとやかく言うことはできないはずなのだ。犬死にだったか、大往生だったかは、残った者が決めることだ。どんな形でそれが訪れようと、生命にとっての死は、ただの死であり、そこに社会や感情が意味を込め得る余地はない。

としたならば、平和と生命とは守られるべきものであるという権利宣言は、

いったい誰に向けられていることになるのだろうか。それは「私の死は避けられるべきである！」と自分自身を指さし要求している姿に似ている。まわりの誰もその要求を叶えることはできず、初めてでそれきりの死という経験は、避けようもなくその人を訪れるだろう。いつであれ、どこであれ、そして誰にとってであれ、その事実が変わりはない。そのとき、「だからこそ生命は尊いのである」と続けるとすれば、それはもはやひとつの「意味」以上のものではないだろう。なぜなら私たちは、生命に代わる何物かを知らず、気がつけば生命であったにすぎないからだ。生まれてくる生命に意味があるように思えるのは、待つ者がそれを与えるからであり、死んでゆく生命に意味があるように思えるのも、見送る者がそれを付与するからである。誕生も死も、最後は他者にとっての問題であり、自分自身にしてみれば、強いられた事実としてあるだけだ。事実から価値は決して導き出されない。幻想が、事実と価値という擬態をゆるす。だから幻滅を知らない価値は脆弱なのだ。いずれにせよ私たちは、生命と死とが、自分を通り過ぎていくただの現象であると思うことが、なかなか耐え難いのだ。(池田晶子、『事象そのものへ!』法蔵館、1995(1991)年、pp.187-189より)。

また夏の終わりに次の文章も目にとまった。(B)・・・マルクス主義者をはじめ社会改革をめざす哲学者たちは、あまり死に関心を示しません・・・それは彼らが哲学者として――どう言おうと――やはり欺瞞的であるからだと思います。・・・理想社会が現実化されたとしても、その後に死んでいく多くの人々のことはやはり問題とならないのであろうか、・・・いかなる革命論者でも、人が死ななくなる社会をめざすわけではないでしょう。とすると、この単純な疑問はいつまでも残るのです。

環境問題が今やさかんです。「緑の地球を子孫に伝えよう！」というスロガン自体に反対ではないのですが、これは「もうじき私が死ぬ」という大問題を覆い隠してしまう麻醉のような作用をもっている。二十一世紀後半、二十二世紀に地球が緑に包まれているとしても、私にとって何の意味があるのでしょうか。いや、そのころは私の子供や孫も生きているかもしれませんが、ではその後一万年たって地球に人類がいたとしてもいないとしても、何の意味があるのでしょうか。さらに百万年後一億年後に、この宇宙に人類が生存したほうがよいのでしょうか。完全に消滅してしまったら何か困ることでもあるのでしょうか。・・・自分が死んだ後の世界、そこには自分が一滴もないのだということの恐ろしさを直視しない、鈍感で欺瞞的な発言だと思います。(中島義道、『哲学の教科書』講談社、1995年、pp.16-17より)。

このような文章を読んでどう考えるだろうか。(A)では、通常の「生命至上」主義や「反戦」主義に、真っ向から反対しているように見える。それは、

何かひねくれた、少し嫌味な、物事を決して正面からではなく、斜めから見る人の意見であるかのように、見える。(B)では、「環境問題」に対し、これも、少しく、斜めから発言しているように思える。どちらも、今、普通に、人々がそうだと思いかけていることに、水を差しているような感じを与えているように見える。いずれも何か、悟りを開いた人の意見のようだ。

だが、また、別なふうにも考えられる。今、世の中で、人々が口をそろえて言いだしていることは、すべて、全く、正しいことなのだろうか。時流に乗り遅れまいと、世の中の流れだけを追っている人もいるかもしれない。いや、そんなことはない、生命を大切に、環境を保全することは、人類の義務なのだという人がきつといることだろう。「それは、結構なことだ、しかし」、と先の著者たちなら言うに違いない。そのとき、生命とは何を指すのか。環境の保全とは誰にとってのことなのか。価値とは。死とは。事実とは。現象とは。

先の著者たちが示そうとしていることは、われわれにはしっかりと物事を吟味することなく、何らかの価値をうのみにするということがある、ということであろう。それはあらゆる分野で生じていることなのだ。最近のもっとも顕著な例は、宗教でのそれであった。マインド・コントロールなどというが、それにひかった人の精神が弱いだけでなく、実はそれはどんな宗教でも大なり小なり、行なわれていることなのだ。つまり、価値を何に見だし、その価値を何によって実現していくかを、自分でしっかりと考えていないかぎり、どんな既成の、伝統的な宗教に身を置いていても、結局は同じことだと言えるだろう。これは宗教だけでなく、政治の上でも、経済の上でも、すべて同じことなのだ。

政治家が、「人命は地球よりも重い」とかつて言った。人命にいったい重さがあるのだろうか。それは何キログラムなのか。・・・そんな馬鹿な、これは単なる比喩の問題だ。それが分からないほどお目出度い奴とは。・・・しかし、それは単に比喩という問題なのだろうか。私はそれは一種のマインド・コントロールだと思う。つまり重さがある話だが、その人命の重さと地球の重さは本来比べることのできないものなのである。比べることのできないものをあたかも比べることができるかのような錯覚を与えることは、マインド・コントロールでなくて何であろうか(本人は単なるレトリックだと言うだろうが、これは論理上の間違いである)。おそらく、発言した本人もこのマインド・コントロールにかかっているのである(本人はすばらしいことを言ったと思っている)。

(A)の著者は、だが、きわめて皮肉である。それはわれわれが見たくないものを見せてくれるからだ。生命は守らなければならないということは、つまり、自分の生命は守らなければならないということなのだ。ただそれを声高に叫んでいるわけなのだ。本音は隠して。私たちは、生命以上の価値を知らないという。だから、何がなんでも、生きようとするのだ。輝く生命を発散させて、

活動する若者の姿は美しい。だがそれと何がなんでも生きようとするのと別ではないか。(B)の著者が言う、一億年後に地球が存続していることは、はたして何か意味があることなのだろうか、という問いもそれだけを見れば、随分と、ニヒリスティックに見えるが、そのところを何ら検証することなく、子孫に美しい地球を残そうというスローガンを叫ぶことは、やはり、知の怠慢であろう。この怠慢は、言葉だけでヒューマニズムを声高に叫ぶ、似而非ヒューマニズムに容易につながる。

しかしである。たとえ、われわれが偶然にこの地上に生きていても、今現に生きている以上われわれは生き続けなければならない(われわれは今、自死をすべしという理由をもたない)。今、われわれが生き続けなければならない以上、われわれの後に来る者たちも生き続けなければならない。ここで、われわれの後に来る者と言ったのは、われわれよりも何十年、何百年後に来る者たちのことだけではなく、刻一刻この地上に生まれてきている者たちをも含むのである。だから、すべての者は生き続けなければならない。つまり生命の連鎖は守られねばならないのである(全人類が一致して、子孫を残さないという決意をしないかぎり)。そしてこれは理屈を越えている。われわれがたとい、生命に代わる何物かを知らないとしても。

だが、事情がそうだと、どうしてわれわれの間に似而非ヒューマニズムがはびこるのだろうか。その理由の一つはすでに触れた知の怠慢による。だが、生命に関してはどうも知だけの責任ではないように思えるところもある。それは、いってみれば、生命の実感というものが希薄になっているからではないだろうか。生命が何であるかは、直ちに明快に答えられなくとも、生命を実感することは、理屈をまたずに、実感できるはずのものである。ところが、どうしたわけか、われわれにはそれが欠けてきつつあるように思える。もう何十年も前の話であるが、ある子供が父親に、「お父さん、カブト虫が動かなくなったから、電池とりかえて」と言ったという話を聞いたことがある。それは生命が何か電氣的な働きと同一視される事態がどこかで起こったことを表している。生き生きとした生命の充実感が、何か他のものと置き換えられた事態が生じたことを意味している。

かつて、駆出しの医者頃、大阪で、不治の病の末期にある人たちばかりが入院している病院で当直をしていた。夜中に病棟に呼ばれ、手を尽くそうとしたが、なにせ、駆出しの医者には限界がある。先輩の主治医を呼び出し、二人で、処置したが、その人は亡くなった(この人の最後を看取ったのは、われわれ医者二人と、看護婦、それに付き添い婦の四人だった。家族は事情があって、遠い鹿児島にいた)。激症肝炎だった。懸命の治療が虚しく終わり、仕事から解放されて、ベットに横たわる亡くなった人を見たとき、そこに見いだしたのは、体の各部から出た管に取り囲まれた骸だった。そのとき確実にその人はもはやいないと感じた。どこをどう探してみても、数分前、苦しんでいたあの人

はいないのである。

二年前、夜中に、父の入院している病院から電話があり、病室に駆けつけたとき、ちらと父の姿を見たたん、もう父はいないと感じた。やはり、そこにあったのは骸であった。この何とも言えない生命の喪失感とはいったい何なのだろうか。

それは逆に言えば、人がたとえ重病で病床に横たわっていても、そこにその人がいるという意識がわれわれのうちに保たれていること、つまり、われわれが生命の実感をもっているということである。人はおそらく身近な者の生命については、鋭敏な感覚をもっているのだが、これが一度、そこから離れると、何か、抽象的なものになってしまうらしい。だから、ある種の市民運動などになるとせっかくの生命の実感を捨てて、声高に叫ぶことになる。それが、先に引用した著者たちからすれば、唾棄すべきものになったように思える。

しかし、問題はそれだけではないようにも思える。というのは、今、自分がどれくらい生きていると実感しているだろうか。病を得た後、快方に向かうわずかの時、生命が充実してくるのを如実に感じる。しかし、毎日の生活に埋没し、思うように事がはこばないような日常の中で、どれくらい、自分に生命の実感があるだろうか。どれほど、人間が互いに生命をもっていることを喜びあえるだろうか。自分の行く手を阻むような行動をする人間に対して、時には、殺意を抱くといった暗い衝動から人間は自由ではない。プラスからマイナスへの大きな振幅をもった人間の心は、自己の中に何か漲るものがないと、自己を越えて出ていくという冒険はできないものようである。まず、自分の中で今、生きているという素直な実感を取り戻すことが必要である。人間は生きている意味をもたなければ、生きていけないと言ったのは、ややファナティックな意見をもつフランクルの言葉である。(A)の著者なら、このようなものの見方自体、一つの幻想に左右されていると言うかもしれない。しかし、一方で、人間は事実だけを直視するにはあまりにも弱い存在である。なるほど、事実だけからすれば、人間の生き死にも一つの現象、あるときに何らかの形で存在し、やがては消滅すべき現象にすぎない。その事実を認めることは、人間存在の深淵を覗き込むことなのだ。人間はそのめくるめく絶壁に、しかし、身をさらす必要はあるだろう。己れの存在の事実を知るために。だが、今、少なくとも、この絶壁から落ちていないことも事実である。だとするならば、この絶壁の上にとどまるのが、一瞬にすぎないかもしれないが、この一瞬を生きることも、「気がついてみたら生命であった」者がなすべきことであろう。生きるとは、しかし、己が生に意味を与えることでなくて何であろうか。だから、意味を喪失したかに見える現代人であるわれわれは、意味を自分で作り出さなければならぬところがある。その前提が生命の実感である。この実感が失なわれていることは、すでに触れたが、それを回復するためには、自分をみつめ、自分の望みを知り、他者の存在を認識し、その他者の望みを知り、他者への共感を養

い、一切の生きとし生けるものの姿を眺めやることである。それには、すべてを包みこむような時がゆるやかに流れることが必要であり、そのような時をわれわれがもつことが何よりも大切なこととして、心底、実感しなければならぬように思う。

参考文献

- 池田晶子 『事象そのものへ!』 法藏館、1995(1991)年
中島義道 『哲学の教科書』 講談社 1995年
V. フランクル (霜山徳爾 訳)『死と愛』 みすず書房 1964年
同 (霜山徳爾 訳)『夜と霧』 みすず書房 1964年